

第三章 室町時代の豊前国

第一節 鎮西探題の滅亡

一 後醍醐天皇の倒幕行動

倒幕計画と 正中の倒幕計画の挫折にも懲りず、後醍醐天皇は、尊雲法親王（大塔宮護良親王おほいたかのみやもりよし）、尊澄法

幕府の対応 親王（宗良親王）を延暦寺へ入れ、興福寺・東大寺などへ行幸して寺院の武力を取り戻もうとして、着々と計画を進めていた。

天皇の側近で、後の三房といわれた一人、吉田定房は、天皇の計画を無謀として反対していたが、入れられず、ついにこれを幕府に告げた。元弘元年（二三三）五月幕府は、天皇の片腕として行動していた日野俊基・僧円観・文観らを捕らえて、断罪もしくは配流に処した。

天皇は、幕府の追及の手が伸びてくると考えて、いったん東大寺へ逃れ、のち笠置山に入った。

禁裏、山門へ行幸の事、去月二十六日、六波羅御教書並び今日鎮西御施行、かくの如し、早く仰せ下さ

るる旨に任せ、用意を致し、馳せ参ぜらるべし、よって執達件の如し

元弘元年九月五日

豊前藏人三郎入道殿

（大友貞宗）
沙弥（花押）

これは、豊後守護大友貞宗が同国国東郡田原別符に住む庶家田原氏へ軍勢催促をかけたもので、上洛することになるが、このとき、延暦寺へ向かったのは天皇の身代わり花山院師賢であつたことが、あとで判明することになる。

楠木正成・護

笠置山は一か月ほどで、幕府の大軍による攻撃のために陥落するが、この間に、金剛山の

良親王の拳兵

西麓河内国赤坂で護良親王（大塔宮）をいただいて楠木正成が拳兵し、近畿一帯で不穏な

情勢が広がつた。

囚われの身となつて京都へ帰還した天皇は、皇太子量仁（光厳天皇）に讓位させられ、翌年三月、承久の

乱の後鳥羽上皇の例に倣つて隱岐島へ移された。

笠置が落城して一か月ほど後に赤坂城も陥落して吉野の山中に姿を隠していた楠木正成は、元弘二年十二月油断を衝いて、河内赤坂・千早城へ戻り、再び立てこもつた。護良親王は吉野に拳兵してともに幕府軍に抵抗を続けた。この間に播磨の赤松円心をはじめとして、各地に反幕府の旗幟を掲げるものが現れ、畿内近国は騒然となつた。幕府の千早城包囲軍の中にも、幕府を見限つて帰国するものが続出し、幕府の屋台骨も揺らいできた。